

古の楽器と音楽の今との間に……

奈津陽子

長い歴史の中で、音楽はまず宗教と深く結びつきその道具ともなってきました。その後、貴族文化の僕としてチェンバロが出現した頃からは、人を楽ませる、一層広い音楽の世界が作られてきました。こうして振り返ってみると、音楽に自由が与えられ、芸術としてこれ程高められているのは、現代が初めてではないでしょうか？

チェンバロが只ひたすら好きで、古楽に没頭していた私が、メシアンを聴いた時、まず圧倒され「何故心に響くのかしら？」と言うナイーブな問いが生まれました。それから音楽の各時代での役割を考えたり、曲を知る程こ、それ等の曲が非常に鋭い音楽的感性を持った作曲家達の長年の研究と思考の産物である事や、明確なコンセプトや構成に裏付けられている事が分かり、改めてその奥深さに魅かれていきました。又、作曲家の先生方との触れ合いは、クリエイションに参加している実感でワクワクする時でもあります。

パリのコンセルバトワールでは、モダンチェンバロとヒストリカルチェンバロが隣り並んでいたため、常に比較でき、その後、パリの博物館の銘器“グジョン”で現代曲を弾く機会を得、「良い音の楽器で現代曲を弾くのだ」と確信するに至りました。

殆どのチェンバリストがモダンチェンバロを弾かなくなった現在、極めて少数のモダンチェンバロを弾くチェンバリストが、その他のチェンバリストと別世界で、あまり好ましくない音をチェンバロと称し、現代曲を演奏しているのですから、そういった現状を把握している作曲家の先生方は曲を書きません。又、ヒストリカルチェンバロで弾けるレパートリーは限られ、「弾かないから書かれない、書かれないから弾かない」という悪循環こなっています。ヒストリカルチェンバロでモダンチェンバロに書かれた曲を弾く為のクリアーポイントは、華奢なヒストリカルチェンバロに16ftをつける事でした。しかし、18世紀にも16ftつきの楽器はあったのだからと、制作の高橋辰郎氏に相談し、出来たのが今回の楽器です。

ヒストリカルチェンバロとして良い音質を保ちつつ16ftをつけるのは大変だったと思いますが、お蔭で夢が叶いました。プーランクも、デュティユーも、ベリオも弾ける訳です。今後、眠っている曲たちを改めて紹介し、ヒストリカルチェンバロと多くのチェンバリストのために作曲の先生方がたくさんの曲を書いてくださる様、願っています。

装飾について

チェンバロは、貴族文化の豊かな美意識に育てられた楽器で、常に装飾に粋を凝らされ、装飾の無いチェンバロは何か欠けている様に見えます。私の楽器は、ゼログラフィーアートに依る作品(制作、松本英樹氏)で装飾してあります。前衛に憧れる者として、“固定しない装飾”を捜していた私にとって、出力が多種、ハイスピードのゼログラフィーアートは、ぴったりのコンセプトを持っています。

紙貼装飾は17,18世紀の手法でもありましたが、今日の接着法だと、取り替えも気軽に出

来る訳です。とは言え、楽器ですから、松本氏は随分、神経を使われたと思います。ART BY XEROX(富士ゼロックス)のご協力、また楽器の装飾とその延長線上のポスターのデザイン、その他様々な点で双方の想像力を引き出し、まとめて下さった松涛ギャラリー池氏にも、心からお礼を申し上げます。最近、アーティストが、ジャンルを超えて摸索しながら接点を見つける様になってきました。私も松本氏の協力により「視覚的にも“アートとして意味のある楽器」、「曲」、「演奏者」によるトリニティを試みる事ができました。